

第9回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会レポート

第9回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会は2025年10月23～25日の3日間、会長である旭川医科大学・大田哲生先生の下で、「リハビリテーション医学の明日に向かって～Let's unite toward our dreams～」をテーマに、旭川市で開催されました。その感想について広報委員会メンバーに伺いました。

【佐浦隆一広報担当副理事長／大阪医科薬科大学】

これまで北海道を何度か訪れたことがありましたが、旭川を訪れたのは今回が初めてでした。ただ、関西から旭川まではやはり距離があり、冬季は伊丹空港からの直行便がなく、羽田空港での乗り継ぎとなりました。

今年は残暑が厳しく、現地の季節感がつかみにくかったため、訪旭にあたり大田哲生会長に「ドレスコード」（苦笑）をお尋ねしたところ、「中に着るものと薄手のコートで対応といったところでしょうか」とのお返事をいただきました。実は、衣替えがまだ済んでいなかったため少し心配しておりましたが、学術集会の直前に秋（というより冬？）が到来し、関西でも気温が下がり始めたため、急遽、冬物を引っ張り出してもらいました。

厚手のコートを着て出発した大阪では少々暑く感じましたが、会期中の夜に旭山動物園で開催された全員懇親会では、この厚手のコートが大いに役立ちました。寒い中、ジンギスカンや旭川ラーメンを堪能でき、とても楽しい時間を過ごすことができました（ジンギスカンは大変人気で、すぐに売り切れてしまい、私が最後だったと思います）。

北海道はとても広く、これまで札幌の市街地以外を訪れる機会がありませんでしたが、今回旭川の地を踏むことができ、本当に良い経験となりました。2027年には弘前大学の津田英一先生が第64回日本リハビリテーション医学会学術集会を開催される予定で、初めての函館訪問となるた

め、今からとても楽しみにしています。

【酒井朋子広報委員長／東京科学大学】

旭川で開催された第9回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会では、2つの会場周辺が美しい紅葉に彩られ、澄んだ空気と晩秋の趣に包まれていました。想像していたほど寒さは厳しくなく、学術集会の合間には心地よい散歩も楽しむことができました。

学術集会の中で特に印象に残ったのは、男女共同参画委員会における東京大学・瀬地山角先生のご講演です。「これまでは一頭立ての馬車だったが、これからは二頭立てで社会を進める時代になる」という比喩は非常に示唆に富んでおり、人口減少が進む現代において、ワークライフバランスはもはや個人の理想論ではなく、社会の存続に不可欠な要素であることを深く理解しました。

また、「高齢化対策も、高齢の定義年齢を引き上げるだけで景色が変わる」という新鮮な視点も強く印象に残り、講演終了後すぐに瀬地山先生の



大田哲生先生の会長講演



瀬地山角先生の文化講演

著書をネットで注文し、再読を通じてようやく内容を自分の中で咀嚼することができました。本講演を通して、自身の価値観を見直す貴重な機会となり、視点が大きくアップデートされたように感じております。

【石田由佳子広報委員／奈良県立医科大学】

今回の秋季学術集会には現地での参加は叶わず、オンデマンド配信にて聴講いたしました。その中でも印象に残ったのは、千葉春子先生の教育講演11「地域リハビリテーションの現状と課題—開業医の視点から—」です。同講演では、地域連携の重要性が繰り返し強調されており、生活期におけるリハビリテーション科医の役割について、改めて深く考えさせられました。

【酒井康生広報委員／島根大学】

第9回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会では、多彩な講演や企画を通じて、大きな刺激と学びを得ることができました。

速水聰先生の教育講演では、ISS（国際宇宙ステーション）での長期滞在における航空宇宙医学とリハビリテーション医学の関わりについて、また宇宙飛行士の健康管理を担う「フライトサーजन」の重要な役割について知ることができました。翌日に行われたH3ロケット7号機の打ち上げは、講演内容を思い出しながら、より身近に感じて見守ることができたのも印象的でした。

清水宏保氏の文化講演では、逆境を力に変える



清水宏保氏の文化講演

思考法や、「100日集中」という現実的かつ実践的なモチベーションの維持方法が心に残りました。

また、会期中には三浦綾子記念文学館と外国樹種見本林も訪れ、学生時代に読んだ『氷点』の世界に思いを馳せながら、静かな余韻の中で学術集会を締めくくることができました。

【谷口直史広報委員／山梨大学】

今回は現地で参加することができませんでしたが、22年ぶりの北海道開催、そして「Unite（つながる・一つになる）」というテーマから、多職種連携や協働への熱い想いが強く伝わってきました。

特に、夜の旭山動物園での懇親会は、北海道ならではの地域色が感じられる非常に魅力的な企画であり、参加された皆様にとって、医学の発展と人的交流が深まる貴重な機会となったことと思います。私自身もぜひ現地でその雰囲気を感じたかったと感じています。

【鶴川俊洋広報委員／鹿児島市立病院】

人生で初めての旭川訪問ということで、寒さの程度がわからず不安を抱えながらの現地入りとなりましたが、初日の到着時こそ雨に見舞われたものの、その後は滞在中ずっと晴天に恵まれ、徒歩での移動でも寒さをそれほど感じることなく過ごすことができました。

今回は、できるだけ北海道在籍の先生方の教育



企業展示の様子

講演を優先的に選んで聴講いたしました。特に、及川欧先生の南極地域観測隊についての教育講演や、金メダリスト・清水宏保氏の文化講演は非常に聞き応えがあり、新たな活力を得ることができました。

旭山動物園での全員懇親会には残念ながら満席のため参加できませんでしたが、急遽、日曜日に他大学の先生方にお声がけいただき、ともに園内を見学する機会を得ることができ、大変感動いたしました。

鹿児島から旭川まではかなりの遠方となるため、当初は参加を迷っておりましたが、学術・交流・グルメ・観光と多くの魅力を堪能することができ、現地参加の意義を改めて強く実感いたしました。

【原田理沙広報委員／神戸大学】

第9回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会に参加してまいりました。晩秋の旭川は冷え込みを感じる気候でしたが、北の大地ならではの黄金色に輝く木々に囲まれ、四季の移ろいを楽しむことができました。

学術面では、当科の鹿島遼河先生がYIA (Young Investigator's Award) にノミネートされ、がん・希少疾患・運動器など多岐にわたるハイレベルな演題の中から、見事に最優秀演題賞を受賞することができました。多くの分野にわたる専門性の高い発表が並ぶ中での受賞は、大変光栄



旭山動物園での全員懇親会

であり、励みとなりました。

展示では、VR関連技術を中心とした先進的な取り組みが多く紹介されており、リハビリテーション医療の未来を強く感じさせる内容でした。

また、旭山動物園での全員懇親会では、迫力あるシロクマの姿に感動し、あざらしまんやホットワインといった温かいお料理も堪能することができました。大田大会長のお人柄が伝わる、温かく素晴らしいひと時となりました。

学術集会終了後には美瑛観光も楽しむことができ、公私ともに充実した、実り多い学会参加となりました。

【正岡智和広報委員／昭和医科大学】

今回は現地参加が叶いませんでしたが、開催後に参加された先生方からお話を伺い、非常に印象的な内容が多かったと感じました。特に、夜の旭山動物園で行われた全員懇親会は、なかなか経験できないユニークな試みで、大変盛り上がったとのことでした。

また、学術プログラムにおいては、高次脳機能障害や認知症への対応に関する発表が多く、日常の臨床業務にもすぐに応用できるような、実用性の高い内容が豊富であったと聞いております。現地でその空気を共有できなかったことは残念でしたが、充実したプログラム内容を通じて、本学術集会の意義の大きさを改めて感じました。

(文責：広報委員会)